

茨城大学学報

第306号

平成24年12月～平成25年1月



改修工事が始まった図書館（水戸キャンパス・H25.01.15撮影）

INDEX

- ◆ インドネシア共和国の三大学を招いてウィンターコースを実施
- ◆ 平成24年度茨城大学・茨城県・茨城産業会議連携講演会の開催
- ◆ 農学部の立川雅司教授が科学研究費助成事業（科研費）審査員の表彰を受けました
- ◆ 学生懇談会を開催
- ◆ 平成24年度茨城大学工学部FD研修会を開催
- ◆ 天心に捧ぐ「コカリナ&朗読コンサート」を開催
- ◆ 学長年頭挨拶
- ◆ 国立大学法人茨城大学コンプライアンス研修を実施
- ◆ 人文学部と茨城町が地域連携に関する協定
- ◆ 公開シンポジウム「教員養成の将来像」を開催
- ◆ 茨城大学男女共同参画講演会を開催

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ インドネシア共和国の三大学を招いてウィンターコースを実施

大学院農学研究科では、副専攻「地域サステナビリティの実践農学教育」として、毎年インドネシア共和国の三大学（ガジャ・マダ大学、ボゴール農科大学、ウダヤナ大学）との交流プログラムを継続的に実施しています。夏季に同国を訪れて実施するサマーコースと対をなす形で、冬季には三大学から教職員、学生を日本に招いてのウィンターコースを行っています。本年のウィンターコースは、インドネシアの学生21名と教員8名を迎え、11月21日（水）～11月28日（水）まで実施しました。また、国内からは本学の大学院生のみならず、筑波大学や北海道大学からも参加がありました。

ウィンターコースはJICA 筑波の訪問から始まり、アフリカなどから来日する研修員の実習園場の見学や、経済的格差を体験するワークショップを行い、白熱した議論が繰り広げられました。ウィンターコースの要となる活動は、日本人学生とインドネシア人学生との混合グループで行うフィールド実習であります。実際に農家や関連施設などを訪問して地域サステナビリティに係わる知見を得るとともに、ディスカッションを通して課題解決能力と国際コミュニケーション能力の涵養を図っています。本年は、茨城県中央園芸農業協同組合（茨城県東茨城郡茨城町）の協力を得て県内のキャベツ農家などを訪問し、聞き取り調査や環境試料の採取を行いました。さらに、その生産物の加工工場や卸売市場を見学し、生産―流通―加工と一連の日本の生鮮野菜の流通システムを体感しました。加工工場における徹底した温度調節、髪の毛一本の混入も許されない衛生管理システムは、インドネシア人学生にとって新たな刺激となったようです。

また、農学部は、独立行政法人農業環境技術研究所と包括的な連携・協力を進めています。農業環境技術研究所が推進するMARCO（モンsoonアジア農業環境研究コンソーシアム）のサテライト・ワークショップとしての位置づけも兼ねて、ウィンターコース内で「アジア地域における環境と農業の持続可能性―国際連携教育による人材育成―」と題したワークショップを開催しました。ワークショップには千葉大学を始めとする近隣大学からも院生や留学生の参加があり、盛況のうちに終了しました。同研究所の八木一行博士による基調講演では、地球化学的な視点による炭素・窒素の循環から「農業の持続可能性」を考察する良い機会となりました。

ウィンターコースでは、グループでのフィールド実習やプレゼンテーション、ポスター発表など、全ての活動をインドネシア人学生と共に英語で行っています。プログラムに参加した学生は、これらの活動を通して異文化に対するマナーを身に付け、着実な議論を可能とする英語運用能力を築きつつあります。また、サマーコースとウィンターコースを通して培われた学生同士の人間関係を基盤として醸成された、「伝えたい」という強い気持ちを感じ取れる実習となりました。より多くの学生が国際人として経験を積んでいけるよう、国際プログラムとして発展的に継続していくことが期待されます。

なお、今回のウィンターコースに、ボゴール農科大学からの強い要請でインドネシア農業省の高官や農業大学校長の視察を同時期に受け入れました。ウィンターコース終了後は

茨城県立農業大学校や茨城県立水戸農業高校などを視察し、職員研修やインターンシップ等、様々な連携の可能性を模索しました。大学院農学研究科では、国を越えた産学官の連携から、今後とも多様な教育・研究機会の提供を目指していきます。



参加型ワークショップ（JICA 筑波）



グループで協力して行う
土壌分析作業（茨城大学）



グループの成果を英語で発表する
最終プレゼン（茨城大学）



インドネシアからの研修生との
意見交換（茨城県中央園芸農協）

◆ 平成24年度茨城大学・茨城県・茨城産業会議連携講演会の開催

本学では、平成24年12月5日（水）に、水戸京成ホテルにおいて、「震災後の活力ある地域社会をつくるー防災と気候変動適応を問い直すー」をテーマに、講演会を開催しました。

この講演会は、茨城大学、茨城県並びに茨城県産業会議との連携により、環境等を主なテーマとして実施しており、今年度は、自然災害や気候変動の現状、さらに防災と適応策について専門家、行政、市民が一堂に会し、安全安心な地域社会のあり方に関して議論することを目的に開催しました。当日は、行政関係者や企業関係者、市民、県内の大学生、専門学校生など約100名が参加しました。

講演会は、池田幸雄学長の開会挨拶に始まり、田中健次地域連携推進本部長からの講演会開催の趣旨説明に続き、三村信男地球変動適応科学研究機関長の「茨城における新しい津波対策と防災対策」、小松利光氏（九州大学大学院工学研究院・特命教授・名誉教授・日本学術会議会員）の「地球温暖化の影響と適応～防災と環境の視点から～」とそれぞれのテーマの基調講演の後、パネル討論を行いました。



パネル討論会の様子



挨拶をする池田幸雄学長

パネル討論は、基調講演講師の二人に斎藤敦氏（茨城新聞社報道部副部長）、石井孝夫氏（大洗町副町長）を加えた4名のパネリストが、参加者からの質問や意見に対して、回答する形で進行しました。参加者からは、「津波の到達時間」や「防災における自治体等の役割」などの質問があり、今後の活力ある地域社会のあり方について活発な議論が交わされる有意義な講演会となりました。

◆ 農学部の立川雅司教授が科学研究費助成事業 (科研費)審査員の表彰を受けました

本学では、平成24年12月10日(月)に水戸キャンパスで、池田幸雄学長から農学部の立川雅司教授への平成24年度科学研究費助成事業(科研費)の審査員表彰を行い、表彰状と記念品の授与を行いました。

科研費とは、人文・社会科学から自然科学までの全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」(研究者の自由な発想に基づく研究)を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビュー(専門分野の近い複数の研究者による審査)による審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。

立川教授は、科研費の審査において有意義な審査を行ったとして独立行政法人日本学術振興会理事長から表彰を受けました。この表彰は、科研費の第1段審査(書面審査)において有意義な審査意見を付した審査員を表彰するもので、今年度は約5,000名の第1段審査(書面審査)委員の中から115名が選考されました。

平成23年度の木村成伸教授(工学部)に続き、本学では二人目の表彰となりました。

本学の研究活動の一層の多様化・高度化を促進していくためには、科研費の採択件数及び採択額の充実を図っていくことが重要であります。そのため、本学では学内に科学研究費申請助言制度を設け、過去に科学研究費の審査委員を経験している学内の研究者などの助言を得て、科研費応募書類のブラッシュアップを図る取り組みを進めています。今回のように本学の研究者が表彰されることは、本学の研究活動の高度化にもつながるものとして大いに期待されます。



左から、神永理事・副学長、立川教授、池田学長

◆ 学生懇談会を開催

大学教育センター（佐藤和夫センター長）では、平成24年12月19日（水）に学生から率直な意見を徴し、更なる充実した学習環境確保に向けた改善を図るため、学部・大学院ともに初年次生を対象に、学習支援・生活支援・学資支援に関する情報交換および意見交換を目的とした学生懇談会を開催しました。

各学部・研究科からそれぞれ数名が参加し、大学教育センター教員および若手の事務職員および技術職員らと交えて、学生に対する大学の支援について、活発な意見交換が行われました。当初は、緊張した面持ちであった1年生らも、議論が進むにつれ硬さもとれ、先輩や教職員と学習支援、生活支援、学資支援などの各話題に対して、積極的に質問を投げかけたり、個人の印象や意見を述べていました。

本学の卒業生で、現在は教育学部職員である小祝達朗技術職員は、奨学金制度の活用に関して「大学院に行く際に、親を説得する材料として奨学金制度があることが決め手になった」と自分の経験を元に語り、学生たちも今後役に立てようと熱心に耳を傾けていた。

懇談会は2時間を超えたにもかかわらず、実施後のアンケートでは、「もっと時間が長い方がいい」という意見が多く、学生たちにとっても他学部生や先輩、教職員の話をお聴きすることのできた有意義な時間となりました。

今後は、まだ大学に慣れていない時期の開催や他学部教員との意見交換もしたいという要望もあり、懇談会に立ち会った、勝本真大学教育副センター長は、「学生からの要望も強く、ぜひ今回の意見を参考にして、次回開催を企画したい」と語りました。

また、この懇談会には大学の学生広報誌「C-mail」の編集委員も取材を兼ねて参加し、取材内容は次号に掲載される予定です。



卒業生として自らの経験を基に語る小祝達朗教育学部技術職員

◆ 平成24年度茨城大学工学部FD研修会を開催

工学部では平成24年12月26日（水）、工学部FD研修会が、「入試と教育の一体改革をテーマ」に開催され、＜外部講師による基調講演＞と＜本学教員による事例紹介＞の2部構成で実施されました。

初めに米倉達広工学部長から挨拶があり、次いで、＜外部講師による基調講演＞では、竹岸章氏（株式会社ナガセ 大学営業部長）をお招きし、「平成27年度入試に向けて」について講演が行われました。

講演では、最近の高校生の基礎学力と高校の評定の付け方、入学前教育について、平成24年度入試分析、今後の工学部の入試戦略について紹介が行われました。特に東北地方からの入学を促進する方策、学科別入学難易度の比較、工学部に関する現役予備校生へのヒアリング調査結果など多岐にわたる内容が紹介されました。

講演後には、質疑応答が行われ、入試方式を変更した場合の学力低下の懸念、AO入試導入の可能性、他大学院へ進学指導について講師との意見交換が熱心に行われました。

引き続き、＜本学教員による事例紹介＞では、本学評価室の鳶田敏行先生から「工学部における学業成績や退学・留年の動向について」と題して工学部学生の退学、留年と単位取得状況、成績との関係に関する分析報告の講演があり、質疑応答が行われました。続いて、大学教育センターの宇野美由紀先生から「レナンディの有効活用の促進について」と題して、レナンディシステムの利用説明、来年度の運用スケジュールについて質疑を交えて説明がありました。

FD研修会には約110名の教職員が約3時間30分にわたって参加し、新たな入試広報、入試戦略への対応及び教育改善に向けて工学部全体で取り組むべき重要なテーマについて議論し、認識を深める良い機会となりました。



竹岸章氏（株式会社ナガセ 大学営業部長）の講演に熱心にメモを取る出席者たち

◆ 天心に捧ぐ「コカリナ&朗読コンサート」を開催

天心・六角堂復興プロジェクト（茨城大学）は、2012 年度グッドデザイン賞、いばらきデザインセレクション 2012 県知事選定及び茨城イメージアップ奨励賞の受賞を記念に復興支援活動のまとめとして一般の方々200 名を招待し、岡倉天心誕生日（旧暦）の 12 月 26 日に天心に捧ぐ「コカリナ&朗読コンサート」を開催しました。

コカリナはハンガリーの民族楽器を基に日本で生み出された楽器で、六角堂再建に用いた樹齢 150 年の杉の残りを利用して、復活の笛「コカリナ」をソプラノ、バリトンの計 40 本を作製しました。そのうちの 1 本（ソプラノ）は、コカリナを演奏されることで知られる皇后陛下へ献上することが報告されました。

コンサートは、コカリナの名付け親で奏者の黒坂黒太郎氏を迎え、矢口周美氏（うた、オートハープ）、見澤淑恵氏（朗読）による三幕構成で開催されました。

朗読（岡倉天心著「茶の本」、天心とインドの女流詩人プリヤンバダの手紙）から開幕し、第二幕は地元北茨城出身の詩人野口雨情が作詞した童謡「しゃぼん玉」ほかを地元コカリナ協会のメンバーとの共演、第三幕は「忘れてはいけない記憶」として、東日本大震災被災地の松から作製したコカリナを含めた演奏は、来場者の想いと一つになり、会場の茨城県天心記念美術館エントランスホールに再生と復興の祈りの音色が響き渡りました。

天心・六角堂復興プロジェクトは、天心の記憶、震災の記憶を確認する場所として、今後も天心遺跡の果たす役割は大きいものと自覚しており、文化財の維持管理、地域の文化振興を通して地域貢献に繋げて行きたいと考えています。



コカリナを演奏する黒坂黒太郎氏と歌の矢口周美氏



復活の笛「コカリナ」

◆ 学長年頭挨拶

平成25年1月7日
学長 池田幸雄

明けまして、おめでとうございます。
本年もよろしく、お願い致します。

昨年はいろいろな事があり、多難な年でした。今年は、民主党から自由民主党に政権が移り、政治的にも新しい年になりました。自由民主党は教育を大事にすると言っておりますが、大学教育にはほとんど言及しておりませんので、その方向性は不明です。



文部科学省は去年6月に「大学改革実行プラン」を作成しましたが、これは産業界からの「グローバル人材等の育成」の強い要請と、財務省からの「膨大な国家財政の赤字」の縮減圧力とが基本にあって、国家戦略会議の議を経た政治主導の結果でした。今後とも、産業界の要請も財務省の圧力も変わらないので、政権が代わっても、この従来の大学改革の方向性は変わらないと思われます。この「大学改革実行プラン」は既に走り出しており、学部ミッションも進行中です。医学部ミッションは、文部科学省ヒアリングが峠を越し、現在教育学部ミッションの文部科学省ヒアリングが始まっております。工学部ミッションも近いうちに開始する予定です。平成25年度には他の3学部のミッションが対象になります。すべてが予定どおりに進んでいます。

本学は、平成27年度を目指して独自の「大胆な大学改革」を実施する予定で、今年はその「改革元年」に当たります。本学の教職員の一層の努力と英知を結集してこの大学改革を推進して参りたいと考えています。

本学の教育改革では、「21世紀の激動する世界で活躍する創造的・総合的・弾力的なグローバル人材の育成」を積極的に推進して、社会からの強い要望に応える事が重要で、本学教員のご理解・ご協力をお願いしたいと思います。

附属学校園では、新政権のマニフェストによると「学校におけるいじめ問題」が注目されていますので、是非、この件に関して特段の配慮をして頂きたいと思ひます。

事務系職員にもお願いがあります。職員自身が大学改革の内容を十分に理解して納得する事が重要です。特に、部課長には、所属する職員に問題点を分かりやすく説明し、互いのコミュニケーションを心掛け、職員間の意思疎通を図る事が大切です。

最後になりますが、本学の「大学改革」を乗り切るべく、全員一丸となって頑張ってくださいと思います。全教職員の一層の奮闘を期待いたしまして、年頭の挨拶と致します。

以上



◆ 国立大学法人茨城大学コンプライアンス研修を実施

本学では、平成 25 年 1 月 10 日（木）に「コンプライアンス研修」を「管理職向け」及び「教職員向け」に実施し、教職員総勢 53 名が受講しました。

本研修は、中期目標計画における法令遵守の整備計画に基づき、本学において「茨城大学行動規範」・「コンプライアンスガイドライン」・「茨城大学学生行動規範」が制定され、公式ホームページ等で公表されたことに伴い、本学の教職員に対し、法令遵守及びコンプライアンスの基本理念の周知を行うとともに、コンプライアンス違反の影響や予防策について個々の立場で学ぶことにより、法令遵守及びコンプライアンス意識の向上を図ることを目的とし、講師に古木孝典氏（株式会社インソース）を迎え、実施したものであります。

教職員向け研修開始前には、本学コンプライアンス推進本部長である山本恵一理事（総務・財務担当）より、「本学では、コンプライアンスにおける行動規範・ガイドライン等が制定・公表され、ようやくスタートラインに立ったところである。本研修を通じ知識・情報を得るばかりでなく、今後、個々人が考え行動できるようになっていただきたい」との挨拶がありました。

各研修の講義において、コンプライアンスの習得レベルとして、第一に「知識・情報を得る」第二に「考え方を学ぶ」第三に「行動する」ことであり、「頭でわかっていることだけでなく、大切なのは行動へ繋げて行くことである」との説明がありました。

また、講義と併せて「日々なかなかコンプライアンスや法令遵守について考える機会がない中、グループミーティングや発表等を通じ、研修メンバーより【気づき】を得て、今後の行動への多くのヒントを得ていただきたい」「茨城大学において今回制定された行動規範は、茨城大学憲章の 5 つの項目とリンクし非常にわかり易い、ぜひ今後の行動へ繋げていただきたい」との激励がありました。

多くの受講者はメモを頻繁に取るなどし、真摯に研修に取り組む姿勢が見られ、研修後のアンケートでは、本研修は「有益であった」との声が多く寄せられたほか、「継続した研修の必要性」「多くの教職員に対するコンプライアンス意識の周知の必要性」「今後さらに考えて行動していきたい」などの意見が複数出され、今後、教職員が協働していくにあたり、本研修がよい刺激になりました。



グループミーティングの様子を伺う講師（教職員向け研修）



講義に耳を傾ける研修者たち（管理職向け研修）

◆ 人文学部と茨城町が地域連携に関する協定

人文学部と茨城町は地域の発展と産業の振興を図るために、平成 25 年 1 月 23 日(水)に地域連携に関する協定を結びました。

地域資源活用による交流人口の増加対策や農業を基盤としたいわゆる 6 次産業への展開方策、まちづくり全般に関する教員によるアドバイスと学生を含めた協働のまちづくりを実践したいなどの茨城町からの提案により、人文学部地域連携委員会では、このような地域課題は、地域振興をはかるための全国共通の課題の一つであると捉え、教員にとっては研究課題としての重要性と学生が所属するゼミナール単位やインターンシップなどを通じた地域課題の発見と政策提言能力の育成などに大きな役割を果たすものと考え、地域連携に関する協定を締結する運びとなりました。

協定の調印式には関係者 9 人が出席し、伏見厚次郎人文学部長と茨城町の小林宣夫町長が協定書に署名しました。伏見人文学部長は「協定を結ぶことで組織的、持続的にまちづくりについて調査研究ができると思う」と述べました。

同学部ではすでに常陸大宮市と大洗町とで地域連携に関する協定を締結し、活動を行っており、その経験とノウハウを活かしつつ、茨城町との地域連携活動に取り組んでいきたと考えています。



小林宣夫茨城町長(左)と伏見厚次郎人文学部長(右)

◆ 公開シンポジウム「教員養成の将来像」を開催

平成 25 年 1 月 23 日（水）教育学部で、公開シンポジウム「教員養成の将来像」を茨城県教育委員会及び水戸市教育委員会の後援により開催しました。

開催に先立ち、池田幸雄学長及び尾崎久記教育学部長が挨拶し、今回のシンポジウムへの期待を語りました。続いて、高岡信也独立行政法人教員研修センター理事による「中教審答申と教員養成と改革」と題して基調講演が行われました。

この中で、高岡氏は、「時代と社会の要請に応える新たな名教師像の確立と人材養成戦略の構築が不可欠、加えて、大学と行政の連携・協働が重要な課題ではないか」と述べました。

基調講演後には、坂越正樹広島大学副学長、田邊一男茨城県教員研修センター次長、河原井信幸水戸市総合教育研究所指導主事らによる「教員養成の将来像～新しい教員養成教育の方向性～」と題してシンポジウムを行い、引き続き、本学の橋浦洋志教育学部教授による講演「茨城大学大学院教育学研究科 GP と教員養成」が行われ、最後に、田代尚弘理事・副学長の挨拶で終了しました。



高岡信也独立行政法人教員研修センター理事による基調講演の様子

◆ 茨城大学男女共同参画講演会を開催

本学教育学部出身であり、茨城県政史上初の女性副知事としてご活躍中の山口やちゑ氏を講師にお招きし、「少子高齢化と男女共同参画について」をテーマに男女共同参画講演会を開催しました。本講演会は平成25年1月17日（木）に本学大学会館において開催し、役員、教職員、学生ら約90名の参加がありました。

講師である山口やちゑ氏は、高等学校教諭から茨城県婦人教育会館（現レイクエコー・茨城県女性プラザ）の社会教育主事を経て、茨城県女性青少年課において女性行動指針策定・普及に取り組まれるなど、行政面で数多くの実績を有する専門家です。

開演にあたり、神永文人理事・副学長からは、本学における女性教職員の割合や、大学の施策・取組、現状の課題等について説明がありました。



講演する山口やちゑ氏（茨城県副知事）

山口やちゑ氏による講演においては、少子高齢化と男女共同参画には密接な関連性があるとの解説があり、諸外国・我が国・茨城県との施策の比較や現在の課題等、さらに今後あるべき取り組み等について、詳細かつ分かりやすい説明がありました。また、東日本大震災における対応で得た教訓として、災害・復興時には平時における男女共同参画に対する意識が非常に重要であるとの事例紹介もありました。

参加者からは「ふだんから常に男女共同参画について意識を持たなければならないと再認識しました。」、「大学における実効ある男女共同参画の実現に向けて、今以上に組織をあげて取り組まなければならないと感じた。」などの感想が寄せられました。



茨城大学男女共同参画講演会の様子